

芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成

村田 菜穂子*¹ 前川 武*²**Formation of Adjectives in Haikai of Basho and Buson.**Nahoko Murata*¹ Takeshi Maekawa*²

キーワード

形容詞、語構成、語構造、俳諧、芭蕉、蕪村、結合タイプ、造語形式

I はじめに

これまで、上代資料・八代集・中古散文作品から採取された形容詞について、それぞれの形容詞がどの資料でどのくらい使用されているかを対照語彙表の形にまとめ、その一方で、各形容詞について語構成を分析し、その結果を拙著『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』^(注1)において前稿①「古代語形容詞の語構成」として公表した。

その後、調査対象を軍記物語・今昔物語集から狂言・キリシタン資料、擬古物語、中世の日記・紀行文へと拡大し、これらから採取された形容詞の対照語彙表^(注2)の公表を続けてきた。

これと並行して軍記物語・今昔物語集の形容詞の語構成についての分析結果をまとめ、「古代語形容詞の語構成」を増補する形とし、同時に、「古代語形容詞の語構成」公表後に気づいた見落としや誤りを修正して、上代から中世に至る資料から採取した形容詞の語構成の分析結果を前稿②「改訂・増補 古代語形容詞の語構成－上代～中世編－」^(注3)として改めて公表し直した。さらに、狂言・キリシタン資料、擬古物語および中世の日記・紀行文の形容詞の語構成についての分析結果を前稿③「狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成」^(注4)、前稿④「擬古物語および中世の日記・紀行文の形容詞の語構成」^(注5)として公表した。

本稿では、前稿④に続く資料として、芭蕉・蕪村の俳諧を取り上げ、芭蕉・蕪村の俳諧に用いられた形容詞の出現数および語構成の分析結果を一覧表の形にして報告する。

対象とした俳諧は「Ⅲ 調査に際して使用した資料」に挙げた索引・本文に基づくが、句数としては芭蕉のものが932句、蕪村のものが2782句である。

*1 むらた なほこ：大阪国際大学国際関係研究所教授〈2016.9.23受理〉

*2 まえかわ たけし：大阪国際大学短期大学部教授

分析の観点は、前稿①に示したが、主な観点は、[a] 語がどのような部分要素（語構成要素）に分けて捉えられるかという点（結合タイプ）と [b] 語がどのような造語成分から組み立てられているかという点（造語形式）である。なお、分析に関する詳細については、前稿①に拠りたい。

Ⅱ 凡例

前稿④に従うが、改めて記載する。

[1] 見出し語の配列

歴史的仮名遣いにより五十音順に配列する。

[2] 見出し語形の統一

意味の違いに関係しない読み方・発音の違いは同一語とみなし合併して採る。同一語・別語の認定は『古語大事典』〔小学館〕・『日本国語大辞典』〔小学館〕に拠る。

例…ねむたし→ねぶたし、あひなし→あいなし等。

この他、今昔物語集（日本古典文学大系）には、「～+方ナシ」に対して、例えば、「可^{タトフベ}警^{ハウ}キ方無シ」「可^{タトフベ}警^{カタ}キ方無シ」のように、「方」の漢字に「ハウ」「カタ」の二通りよみが付されている。しかし、両者の使い分けに一定のルールが認められず、「ハウ」とよむ必然的理由が見出せない。また、これまでに取り上げた資料の中に「～+ハウナシ」という形容詞は一例も見られない。以上のようなことを鑑み、大系で「～+ハウナシ」とよみがなが付されている形容詞は「～+カタナシ」に含めた。

[3] 助詞・助動詞（補助動詞を含む）を介在させている語および接頭辞が付いた語の扱い

助詞・助動詞（補助動詞を含む）を介在させている語形、および接頭辞が付いた語形は次のように扱った。

- (1) 助詞・助動詞（補助動詞を含む）を外した語形が対象とした資料に存在する場合は、助詞・助動詞（補助動詞を含む）を外した語と合併して採る。

例…いふかひもなし→いふかひなし、やるかたもなし→やるかたなし、
なにたかし→なだかし等。

例…いはむかたなし・いふべきかたなし→いふかたなし、とりまうしがたし→とりがたし、ゆるされがたし→ゆるしがたし等。

- (2) 助詞・助動詞（補助動詞を含む）を外した語形が対象とした資料に存在しない場合は、助詞・助動詞（補助動詞を含む）を外した語形を仮の語形として設定し立てる。

例…うとましげもなし→うとましげなし、まじりもなし→まじりなし等。

例…かきつくさむかたなし→かきつくすかたなし、すべきかたなし・せむ

かたなし→するかたなし、えたりかしこし→えかしこし等。

(3) 接頭辞の付いた語の扱い

例…おんころたがひなし→ころたがひなし、おんころづよし
→ころづよし

以上のように、接頭辞を外した語形で採る。

[4] 複合語の扱い^(注6)

名詞+形容詞(例…おくふかし・かひなし)や動詞連用形+形容詞(例…ありがたし・はべりにくし)等は切り離さず複合的な単位として認め、一語として扱う方針によって形容詞を選出した。これは、形容詞の造語法として複合語の産出が新語形成の一端を担っている事実を重視したことに拠る。

[5] 新出

芭蕉または蕪村の俳諧にて初めて出現した形容詞がわかるようにした。

新出形容詞のうち芭蕉の俳諧のみに出現したものには「芭蕉」と、蕪村の俳諧のみに出現したものは「蕪村」と、芭蕉・蕪村の両方に出現したのものには「芭・蕪」と記した。

[6] 活用

各見出し語がそれぞれ何活用の形容詞であることを示したもの

[7] 漢字

各形容詞の主な意味を表すために適宜振ったもの

[8] 出現数

各形容詞の芭蕉または蕪村の俳諧での出現数

[9] 十資料における出現状況

各見出し語がどの資料に使われているかを簡潔に示すべく、その見出し語が使われた資料に○を施した。

十資料とは、【上代資料】【八代集】【中古散文作品】【訓点資料】【今昔物語集】【軍記物語】【擬古物語】【中世の日記・紀行文】【狂言】【キリシタン物】を指す。(表中では、下線部で示したもので略記した)なお、各資料に含まれる作品は次のとおりである。

【上代資料】

『時代別国語大辞典上代編』に立項されている形容詞のうち、東歌・防人歌に使われている東国語方言の語や複合形容詞中にのみその存在が確認される語を除き、万葉集・古事記(仮名書き部分)・日本書紀(同)・風土記(同)・続日本紀宣命・祝詞に用例のあるものを上代形容詞として認めた。

【八代集】

『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』『新古今集』

【中古散文作品】

『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『多武峯少将物語』『篁物語』『宇津保物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『和泉式部日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『堤中納言物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『讃岐典侍日記』『とりかへばや物語』

【訓点資料】

『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』『神田本白氏文集卷第三・四』『高山寺本古往来』

【今昔物語集】

『今昔物語集』

【軍記物語】

『保元物語』『平治物語』『平家物語』

【擬古物語】

『松浦宮物語』『山路の露』『風に紅葉』『木幡のしぐれ』

【中世の日記・紀行文】

『海道記』『東関紀行』『うたゝね』『とはずがたり』『竹むきが記』

【狂言】

『天正狂言本』『虎明本狂言集』『虎清本狂言集』『狂言六義』『狂言記』

【キリシタン資料】

『天草本平家物語』『天草版伊曾保物語』『天草版金句集』『懺悔録』

【10】造語形式

話がどのような部分要素（語構成要素）に分けて捉えられ、それぞれの要素がどのような階層的構造にあるかという語構造すなわち「語のつくり」の問題とは別に、発生論的な観点から、話がどのような造語成分から組み立てられているかという語の生産方式、すなわち「語のくみたて」（造語）の問題がある。「語のくみたて」（造語）の方式を考えるに際して、最終結合次の前項要素（ α ）と後項要素（ β ）をそれぞれ一つの造語成分として捉え、それぞれの造語成分の品詞性を分類して、各形容詞の最終結合次の形式がいかなる成分同士の結びつきかを二項式 [$\alpha + \beta$] で表したものを《造語形式》と呼ぶ。

以下に、 α に位置する造語成分と β に位置する造語成分とを分類して示す。

【 α 】

接頭辞	結合形式の造語成分	接尾語基	自立形式の造語成分（単語）	重複形
カ	語基	（語基＋カ）	名詞	語基の重複
ケ	名詞被覆形	（語基＋キ）	動詞（連用形）	名詞被覆形の重複
コ	動詞被覆形	（語基＋ケ）	動詞（連体形）	形容詞（語幹）の重複

芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成

サ	形容詞（語幹）	（語基＋サ）	副詞	名詞の重複
タ	形容動詞（語幹）	（語基＋セ）		動詞（連用形）の重複
ヒ		（語基＋ネ）		副詞の重複
ヲ		（語基＋マ）		
ソラ		（語基＋メ）		
トコ		（語基＋ツカ）		
ナマ		（語基＋ツケ）		
モノ		（動詞被覆形＋カ）		
		（動詞被覆形＋ラ）		
		（動詞被覆形＋ヤケ）		
		（形容詞（語幹）＋ツケ）		
		（動詞（連用形）＋ゲ）		
		（名詞＋ゲ）		

【β】

接尾辞	形容詞
シ	形容詞（無シ以外）
ジ	無シ ^(注7)
ケシ	
ナシ（甚）	
ハシ	
マシ	
ガハシ	
ガマシ	

※造語形式または結合タイプが不明な形容詞については一覧から除外した。^(注8)

[11] 結合タイプと構成単位数

結合タイプとは、語がどのような部分要素（語構成要素）に分けて捉えられ、それぞれの要素がどのような階層的構造にあるかという語構造（語のつくり）を記述しようとするものである。

語構造（語のつくり）を記述するのに際して、まずはその前提となる語を構成する部分要素、すなわち語構成要素の認め方と分類を明らかにする必要がある、野村雅昭氏^(注9)が語（単語）を構成する要素について次のように定義しているのが参考となる。

語基……語の意味的な中核となるもので、単独で、語を構成することもできる。

接辞……語基と結合して、形式的な意味をそえたり、語の品詞性（文法的意味）を決定したりする。単独では語を構成することはできない。

このように、語構成要素は【語基】と【接辞】に大別することができ、さらに【語基】は、その独立性の違いから、単独で語を組み立てることができる自立形式の要素と、単独で語を組み立てることができない結合形式の要素との二つに分けることができる。^(注10) 前者のような自立形式である【語基】は、有坂秀世氏^(注11)のいわゆる「名詞・動詞の露出形」(単語)に対応するものであり、後者のような結合形式である【語基】は、有坂氏の「名詞・動詞の被覆形」、乃至は「形状言」^(注12)と呼ばれるものに対応するものである。

また、【接辞】は、【語基】に対する位置によって【語基】の前に付く〈接頭辞〉と後ろに付く〈接尾辞〉の二つに分けられ、語基に対する位置によって、〈接頭辞〉と〈接尾辞〉とが区別される。記述に際して、便宜的に、結合形式である【語基】を「ゴ」、自立形式である【語基】を「タ」、さらに、【接辞】は(その位置によって〈接頭辞〉と〈接尾辞〉とが区別されるので)ひとつにまとめて「セ」で表す。これに従えば、「な／し・さが／なし・ゆか／し」等の語は、(ゴ+セ)という二つの語構成要素から成り立っている2単位語ということになり、「をさ／な／し・おく／ゆか／し」などの語は、[タ+(ゴ+セ)]という三つの語構成要素から成り立っている3単位語、また、「こころ／をさ／な／し」などの語は {タ+[タ+(ゴ+セ)]}、「み／すて／がた／し」などの語は [(タ+タ)+(ゴ+セ)]という四つの語構成要素から成る4単位語ということになる。

[12] 階層構造

階層構造とは、拙著で詳しく述べたように、成立した語形が形容詞として第一番目のものであるか、あるいは既存の形容詞に何らかの語構成要素が接合して構成された第二番目(この第二番目の形容詞にさらに別の要素が接合して構成された第三番目)のものであるかを分析したものであり、派生や複合によってどの程度自己増殖が進んでいるかを捉えようとした観点である。具体的に言うと、形容詞として成立した第一番目の語形である第一次形容詞として「なし・くるし」等があり、この第一次形容詞から構成された「をさ／なし・こころ／ぐるし」等は第二次形容詞ということになる。さらに、この第二次形容詞から構成された「こころ／をさ／なし・もの／こころ／ぐるし」等は第三次形容詞となり、対象とした資料から採取された形容詞にはこのような三段階のものが存在する。

Ⅲ 調査に際して使用した資料

『芭蕉・蕪村発句総索引 本文索引編』^(注13)

『芭蕉・蕪村発句総索引 語彙索引編』^(注14)

【付記】

本稿は、日本学術振興会平成28-30年科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号

16K02746) による研究成果の一部である。

- 注1 [2005・11和泉書院]。元は、『大阪国際女子大学紀要』27-1 [2001・9]。拙著には、「古代語形容詞の語構成」(別表一)のほか、「八代集の形容詞対照語彙表」(別表二)「中古散文作品の形容詞対照語彙表」(別表二)「訓点資料の形容詞の語構成」(参考資料)を載せている。
- 注2 ①「軍記物語の形容詞対照語彙表」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』21-3 [2008・3])、②「今昔物語集の形容詞対照語彙表一天竺・震旦部一」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』22-3 [2009・3])、③「今昔物語集の形容詞対照語彙表一本朝仏法部一」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-1 [2009・10])、④「今昔物語集の形容詞対照語彙表一本朝世俗部一」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-2 [2010・1])、⑤「『形容詞対照語彙表』補遺」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-2 [2010・1])、⑥「改訂・増補 古代語形容詞逆引き対照語彙表一上代～中世編一(前編)」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』24-3 [2011・3])、⑦「改訂・増補 古代語形容詞逆引き対照語彙表一上代～中世編一(後編)」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』25-1 [2011・10])、⑧「『時代別国語大辞典 室町時代編』の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』25-2 [2012・1])、⑨「『邦訳 日葡辞書』の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』26-1 [2012・10])、⑩「狂言の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』27-2 [2014・1])、⑪「キリシタン資料の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』27-3 [2014・3]) ⑫「擬古物語の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』29-1 [2015・10])、⑬「中世の日記・紀行文の形容詞」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』29-2 [2016・1])
- 注3 『帝塚山学院大学日本文学研究』41 [2010・2]
- 注4 「狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』29-1 [2015・10])
- 注5 「擬古物語および中世の日記・紀行文の形容詞の語構成」(『大阪国際大学紀要国際研究論叢』29-3 [2016・3])
- 注6 なお、「みまうし」「いはまほし」等、～まうし・～まほしの語は採らない。また、「あるべかし」を一形容詞とする見方も存在するが、ひとまず措くことにする。
- 注7 「無シ」を特立した理由は、これを後項要素とするものが際立って多いこともさることながら、「無シ」が他の語のようにある特定の概念を示すものではないという点で、ひとまず他のク活用形容詞と区別している。
- 注8 従来からの分析で不明と判断されたものとしては、「あぶなし」(『保元物語』『平家物語』『虎明本狂言集』『狂言六義』『狂言記』)がある(かっこ内は出現した作品を示す)。
- 注9 野村雅昭氏「造語法」(『岩波講座日本語』9 [1977・6、岩波書店])
- 注10 ここで言う a 自立形式である【語基】および b 結合形式である【語基】は、阪倉篤義氏『語構成の研究』で言うところの「本来自立の用法を有する単語」および「これに準ずる言語単位」にはほぼ相当する。さらには、a および b は、蜂矢真郷氏「語構成と形状言」(『語文』65 [1996・2]) および『国語重複語の語構成論的研究』[1998・4、塙書房]で言うところの、「独立的要素」および「準独立的要素」に当り、そして、【接辞】は「非独立的要素」に当る。
- 注11 『国語音韻史の研究』増補新版「国語にあらはれる一種の母音交替について」および「母音交替について」[1957・10、三省堂]
- 注12 川端善明氏『活用の研究』I [1978・3、大修館書店] 序説、同書II [1979・2] 第2部第1章～第4章
- 注13 道本武彦・谷地快一著 [1983・1、角川書店]
- 注14 道本武彦・谷地快一著 [1983・1、角川書店]

NO.	見出し語	新出	活用	漢字	芭蕉 出現数	蕪村 出現数	上代	八代	中古	調点	今昔	軍記	擬古	日記	狂言	キリ	造語形式	結合タイプ	構成 単位数	階層 構造
1	あかし		ク	赤	2	4		○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
2	あけやすし		ク	明易		5		○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
3	あさし		ク	浅		3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
4	あさまし		シク	浅		5		○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
5	あし		シク	悪		6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
6	あたらし		シク	新		1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
7	あぢきなし		ク	味気無		2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	(語基+キ)+ナシ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
8	あつし		ク	厚・敦		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
9	あやし		ク	晷・熟	4	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
10	あやし		シク	靈異・奇・怪		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
11	ありがたし		ク	有難	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
12	あをし		ク	青	3	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
13	いかめし		シク	蔽	1			○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+シ	[(ゴ+タ)+セ]	3	第一次
14	いとまなし		ク	暇無		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+無シ	[(タ+タ)+ (ゴ+セ)]	4	第二次
15	いはけなし		ク			2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞(連用形)+ナシ	(タ+セ)	2	第一次
16	いやし		シク	賤・卑		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
17	うおくさし	蕪村	ク	魚臭		1											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
18	うし		ク	憂	5	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
19	うすし		ク	薄		2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
20	うつくし		シク	愛・美	2	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
21	うつつなし		ク	現無		3											名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
22	うとし		ク	疎		2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
23	うらみなし	蕪村	ク	恨無		1											動詞(連用形)+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
24	うらやまし		シク	羨	1	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
25	うれし		シク	嬉・歡	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
26	えそごとなし	蕪村	ク	絵空事無		1											名詞+無シ	[(タ+(タ+タ))+ (ゴ+セ)]	5	第二次
27	おそし		ク	遅・鈍	2	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
28	おそろし		シク	恐	1	4		○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
29	おとなし		ク	音無		7		○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次

芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成

NO.	見出し語	新出	活用	漢字	芭蕉 出現数	蕪村 出現数	上代	八代	中古	調点	今昔	軍記	擬古	日記	狂言	キリ	造語形式	結合タイプ	構成 単位数	階層 構造
30	おどろきやすし	蕪村	ク	驚易		1											動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
31	おなじ		シク	同	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+ジ	(ゴ+セ)	2	第一次
32	おほし		ク	多・大		3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
33	おほつかなし		ク	覚束無	1	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(語基+ツカ)+ナシ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
34	おもし		ク	重	1	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
35	おもしろし		ク	面白	6	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
36	おもたし		ク	重		4		○									形容詞(語幹)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
37	かうばし		シク	香	2	2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
38	かぐはし		シク	香		2	○		○								名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
39	かぐれよし	蕪村	ク	隠良					○								動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
40	かごとがまし		シク	託言	1												動詞+ガマシ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
41	かしこし		ク	恐・畏・賢		2		○					○				名詞	(タ+セ)	2	第一次
42	かたし		ク	難	2	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
43	かなし		シク	悲・哀・愛	4	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
44	からし		ク	辛・鹹・酷	1	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
45	かろし		ク	軽	2	3			○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
46	きゃらくさし	蕪村	ク	伽羅臭		1											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
47	きよし		ク	清	3	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
48	きりふかし	蕪村	ク	霧深		2											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
49	くぼし		ク	窪	1												語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
50	くらし		ク	暗	3	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
51	くるし		シク	苦		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
52	くろし		ク	黒	4	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
53	けうとし		ク	気疎		1			○				○				ケ+形容詞	[セ+(ゴ+セ)]	3	第二次
54	けむつかし		シク	気難	1												ケ+形容詞	[セ+[(ゴ+セ)+セ]]	4	第二次
55	こえなし	蕪村	ク	声無		1											名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
56	こえふかし	蕪村	ク	声深		1											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
57	こころにくし		ク	心憎		2			○				○	○	○	○	名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
58	こし		ク	濃		2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
59	こひし		シク	恋	3	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次

NO.	見出し語	新出	活用	漢字	芭蕉 出現数	蕪村 出現数	上代	八代	中古	訓点	今昔	軍記	擬古	日記	狂言	キリ	造語形式	結合タイプ	構成 単位数	階層 構造
60	こぶかし		ク	木深	1	1			○				○				名詞被覆形+形容詞	[ゴ+(ゴ+セ)]	3	第二次
61	さうざうし		シク	0		1			○		○		○		○		語基の重複+シ	[(ゴ+ゴ)+セ]	3	第一次
62	さげくさし	芭蕉	ク	酒臭	1												名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
63	さだめなし		ク	定無	1			○			○		○		○	○	動詞(連用形)+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
64	さびし		シク	寂・淋	4	4	○	○	○				○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
65	さむし		ク	寒	10	22	○	○	○	○	○		○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
66	したし		シク	親		2			○	○	○		○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
67	しづけし		シク	静	1	1	○	○	○							○	(語基+ケ)+シ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
68	しほらし		シク	奏	1	1									○		動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
69	しるし		ク	知・灼・著	1	1	○	○	○		○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
70	しろし		ク	白	10	23	○	○	○	○	○		○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
71	すくなし		ク	少		3	○	○	○	○	○		○	○	○	○	語基+ナシ	(ゴ+セ)	2	第一次
72	すげなし		ク	0	1	1	○	○	○	○	○		○		○	○	語基+ナシ	(ゴ+セ)	2	第一次
73	すごし		ク	凄	2	1			○				○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
74	すさまし		シク	凄冷	1				○		○		○		○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
75	すずし		シク	冷・涼	6	2	○	○	○	○	○		○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
76	そさうがまし	蕪村	シク	龜相・粗相・疎相		1											名詞+ガマシ	(タ+セ)	2	第二次
77	たかし		ク	高	1	9	○	○	○	○	○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第二次
78	ただし		シク	正	1	1			○	○	○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
79	たのもし		シク	頼	2	4	○	○	○	○	○		○		○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
80	たふとし		ク	貴・尊		9	○	○	○	○	○		○		○	○	タ+形容詞	[セ+(ゴ+セ)]	3	第二次
81	ちかし		ク	近	5	12	○	○	○	○	○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第二次
82	ちひさし		ク	小	1	4	○	○	○	○	○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
83	ついでがまし	蕪村	シク	序		1											名詞+ガマシ	(タ+セ)	2	第二次
84	つきづきし		シク	付付		1			○		○		○				動詞(連用形)の重複+シ	[(タ+タ)+セ]	3	第一次
85	つがなし		ク	無恙・無事	1	1	○				○				○	○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
86	つつまし		シク	慎	1			○	○		○		○				動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
87	つめたし		ク	冷	1	1			○		○		○		○	○	名詞被覆形+形容詞	[ゴ+(ゴ+セ)]	3	第二次
88	つらし		ク	辛		2	○	○	○	○	○		○		○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
89	つれなし		ク	無情	1	2			○		○		○		○	○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次

芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成

NO.	見出し語	新出	活用	漢字	芭蕉 出現数	蕪村 出現数	上代	八代	中古	訓点	今昔	軍記	擬古	日記	狂言	キリ	造語形式	結合タイプ	構成 単位数	階層 構造
90	とほし		ク	遠	1	34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
91	ともし		シク	乏		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
92	ながし		ク	長	1	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
93	なかよし		ク	仲良		1											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
94	なし		ク	無	22	72	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
95	なつかし		シク	懐	2	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
96	なまぐさし		ク	生臭	1	1				○	○	○	○	○	○	○	ナマ+形容詞	[セ+(ゴ+セ)]	3	第二次
97	なみなし	蕪村	ク	波無		1											名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
98	ながし		ク	苦	2						○					○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
99	にくし		ク	憎	1	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
100	ぬくし	芭蕉	ク	温・暖	1												語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
101	ねぐるし	蕪村	シク	寝		1											動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
102	ねむし		ク	眠	1											○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
103	はかなし		ク		1			○	○	○	○	○	○	○	○	○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
104	はしたなし		ク	端		2											形容動詞(語幹)+ナシ	(ゴ+セ)	2	第一次
105	はづかし		シク	恥		1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(動詞被覆形+カ)+ナシ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
106	はやし		ク	早・速	4	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
107	ひきし		ク	低		8										○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
108	ひだるし		ク	0		1										○	ヒ+形容詞	[セ+(ゴ+セ)]	3	第二次
109	ふかし		ク	深	2	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
110	ふるし		ク	古・旧	3	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
111	ほし		シク	欲	1	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
112	ほそし		ク	細	2	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
113	まぎらはし		シク	紛	1												動詞被覆形+ハシ	(ゴ+セ)	2	第一次
114	まことがまし	蕪村	シク			1											名詞+ガマシ	(タ+セ)	2	第二次
115	まづし		シク	貧・貧窮	1	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
116	まばゆし		ク	目眩・眩	1	1											名詞被覆形+形容詞	[ゴ+(ゴ+セ)]	3	第二次
117	まるし		ク	丸	1	1										○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
118	みじかし		ク	短	1	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
119	みづくさし		ク	水	1	1											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
120	みなとがまし	蕪村	シク	湊		1											名詞+ガマシ	(タ+セ)	2	第二次

NO.	見出し語	新出	活用	漢字	芭蕉 出現数	蕪村 出現数	上代	八代	中古	訓点	今昔	軍記	擬古	日記	狂言	キリ	造語形式	結合タイプ	構成 単位数	階層 構造
121	みみうとし	蕪村	ク	耳疎		2											名詞+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
122	むくつけし		ク	0		2		○			○		○				(語基+ツケ)+シ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
123	むつかし		シク	難	1			○			○		○			○	(語基+カ)+シ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
124	むつまし		シク	親・睦		3	○	○			○		○			○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
125	めづらし		シク	珍	1		○	○			○		○			○	(動詞被覆形+ラ)+シ	[(ゴ+セ)+セ]	3	第一次
126	めでたし		ク	愛	2			○			○		○			○	(動詞(連用形)+形容詞	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
127	めんぼくなし	蕪村	ク	面目無		1		○								○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
128	もろし		ク	脆	2		○	○			○		○			○	語基+シ	(ゴ+セ)	3	第二次
129	もんなし	蕪村	ク	門無		1											名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
130	やさし		シク	恥・優		1	○	○			○		○			○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
131	やすし		ク	安・易		1	○	○			○		○			○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
132	やまなし	蕪村	ク	山無		1											名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
133	やむごとなし		ク	止事無		1		○			○		○			○	名詞+無シ	[(タ+タ)+(ゴ+セ)]	4	第二次
134	ゆかし		シク	0	4			○			○		○			○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
135	ゆゆし		シク	齋忌・忌		3	○	○			○		○			○	語基の重複+シ	[(ゴ+ゴ)+セ]	3	第一次
136	よし		ク	良・好・善	6		○	○			○		○			○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
137	よろし		シク	宜	1		○	○			○		○			○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
138	わかし		ク	若		1		○			○		○			○	語基+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
139	わびし		シク	佐		4	○	○			○		○				動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
140	わりなし		ク	理無	1			○			○		○			○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次
141	をかし		シク	可咲・可笑	2			○			○		○			○	動詞被覆形+シ	(ゴ+セ)	2	第一次
142	をさなし		ク	幼	1			○			○		○			○	名詞+無シ	[タ+(ゴ+セ)]	3	第二次